

MERA 第 28 大会ワークショップの報告

「建築計画学における心理学的研究の発祥と展開」の報告

田中康裕 ダチケンゼミ

2021年5月29日、ワークショップ「建築計画学における心理学的研究の発祥と展開」がオンライン形式で開催され、47名が参加した（以下、文中敬称略）。

足立孝（1919～1993年）は、建築計画学における「人間と建築」の関係に関する研究の不足と偏りの自覚から、建築における人間存在を行動・心理の側面から把握するため「心理学的研究」の導入の必要性を主張し、多くの研究を発表した。その研究は、日本における環境心理学や環境行動研究の先駆をなすものである。

2019年、ダチケンゼミが『足立孝先生生誕百周年記念論文集：人間・環境系からみる建築計画研究』（以下、『記念論文集』）^[1]を出版した。『記念論文集』の第一部では舟橋國男が「足立孝の初期研究に関する一考察」を、第二部ではダチケンゼミの9名が各自関心のあるテーマを執筆した。第一部には足立孝の博士論文「設計計画に於ける機能拡張に関する研究」（1957年）の序説（以下、「序説」）を復刻して掲載した。

ワークショップは、『記念論文集』の出版を契機として、足立孝の初期研究、及び、現在につながる展開を取りあげ、建築計画学ならびに人間・環境系研究のあり方について議論することを目的とするものである。

本稿では、筆者にとって特に興味深かった3つの観点から、ワークショップについて報告したい。

■プログラム

- ・司会：小林健治（摂南大学）
- ・内容説明：舟橋國男（大阪大学）、鈴木毅（近畿大学）
- ・コメント：南博文（九州大学）、大野隆造（東京工業大学）、羽生和紀（日本大学）
- ・意見交換：松本光太郎（茨城大学）、諫川輝之（東京都市大学）、参加者全員
- ・まとめ：林田大作（畿央大学）

■役に立つこと／プラグマティックであること

舟橋國男による『記念論文集』第一部の論考は、足立孝が研究を始めた当時の関連研究状況の整理から始まる。戦後の建築計画学には今和次郎、西山卯三らによる人間を生理的存在として捉えるグループと、庶民住宅の研究以降の西山卯三、吉武泰水らによる社会的存在として捉えるグループがあった。両者は人間の捉え方が異なるものの、内面にはあえて立ち入らないという立場をとっていたという共通点がある。足立孝は両者を見据えながら、新たな人間の捉え方として「心理的存在としての人間」に注目した。ただし舟橋國男からは、足立孝がしばしば「自らは決して心理学者になるつもりはない、建築計画学として建築設計における課題を解決しなければ意味がない」と話していたというエピソードも紹介された。

「序説」で足立孝は「自分自身を支配する法則を知ることによって、自分自身に対して自由になり得る」と記している。この記述について南博文からは、法則を知ることによって何かを支配するというのは、役に立つことを目指すことに近いが、そうではなく、法則を知ることによって自分自身に対して自由になることができるという見方は新しいという指摘がなされた。

鈴木毅からは、建築計画学がこれまで前提にしていたことに偏りがあったのではないかという問題提起がなされた。その前提とは、「人間を理性的・合理的な思考・行動をする存在として捉える」、「人間を施設の利用者として（のみ）捉える」、「地域の商店を購買施設として（のみ）捉える」、「建築は調査研究に基づいた根拠をもって計画されるべきである」である。『記念論文集』第二部における論考はこれらの前提を問い直すもので、自然・物、デザインから刺激を受ける生理的存在としての人間でも、社会、制度に関わる社会的存在としての人間でもなく、様々な環境のスケールやタイムスパンで、町や（居）場所をつくり、つかう存在としての人間に注目するかたちで、足立孝の研究を展開するものである。

松本光太郎からは、建築計画学における役に立つ／役に立たないという議論ではプラグマティックが狭い意味で使われてきたのではないかという指摘がなされた。プラグマティックとは元々、事後的であることを意味する。『記念論文集』で取りあげられている、環境とともに変わっていくこと、やりながらわかっていくことなどの事例は、事後的という意味でプラグマティックとして捉え得るということである。

足立孝は建築設計における課題を解決するために、機能主義を否定するのではなく、機能を拡張するという方向を目指した。諫川輝之からは、当時と現在では機能の意味が変わっており、現在では専門家が作って、それを使い手が利用するというかたちにとどまらない多様な計画の考え方が広まっている。これが『記念論文集』に現れているという指摘がなされた。

これに対して、森傑（北海道大学）からは、建物が完成した後に、人が環境に働きかけ、環境が変化していくことが重要であるのは言を俟たないが、建築計画学を名乗る以上、建物の最初の計画について腰がひけてはいけぬ。計画の現在的な意味について、自らの課題として考えていきたいという発言があった。

建築設計における役に立つ／役に立たないという議論について、舟橋國男から建築設計とは何か、課題とは何か、課題を解決するとは何を意味するのかという問題提起もなされた。

■人間・環境系として捉えること

足立孝は建築計画学に心理学を導入するに際して、当時の心理学を構造主義、ゲシュタルト心理学、機能主義（行動主義、目的主義、精神分析学）、精神科学的又は了解心理学の4学派に整理し、それぞれに特徴的な分野、方法、主な研究者などをまとめた表を「序説」に掲載している^[2]。

この表について、南博文からは、建築計画学からは心理学がこのように映っていたのだと改めて認識したが、同時に、この表から心理学が全体としてどのような人間観を持っているかを見出すのは難しいのではないかという指摘がなされた。さらに、建築計画学はこの表の「環境」^[3]版を作って、建築計画学が全体としてどのように環境を捉えているかを見

出すことができるのだろうか。心理学が全体としてどのような人間観を持っているかを提示できないように、建築計画学も全体として環境をどのように捉えているかを提示することはできないのではないか。けれども、例えばアフォーダンスの概念によって人間側のある側面と環境側のある側面がくっついていくことが見えてくるように、人間・環境系として結ぶことによって初めていくつかの道が見えてくる。ここに、人間・環境系として捉えることの意味があるという指摘がなされた。

羽生和紀からは、足立孝が建築計画学に心理学を導入するにあたって、用語や概念ではなく、技術を導入しようとしたこと、また、心理的要因・ヒューマンファクターというだけでなく、人間的・心理学的要素そのものを研究の中心に置いていることが注目されるという指摘がなされた。

松本光太郎からは、足立孝が心理学に求めたことに対して、心理学は充分に応えていなかったと感じるが、自らが行ってきた構成概念をできるだけ使わない、主観性を扱う、仮説検証ではなくアブダクションという論理の方法を用いる研究を含めて、足立孝が捉えた心理学から外れる研究もあり、このような研究をどう連結していくかが、人間・環境学会の重要な役割ではないかという指摘がなされた。

■物語を語ること

大野隆造からは、人類学者のティム・インゴルドの『ラインズ：線の文化史』（左右社、2014年）の議論に触れて、知識を伝達することについての指摘がなされた。ティム・インゴルドは輸送（transport）と徒歩旅行（wayfaring）という2つのモデルを提示している。輸送とは点と点を直線で結ぶもので、人はその上を乗客として動かされる。一方、徒歩旅行においては、自ら歩くことを通して環境についての知が作り出されていく。徒歩旅行における経路は、直線ではなく、撚り合わさった踏み跡（trail）である。知識の伝達も徒歩旅行のモデルで捉えることができる。即ち、知識とは「物語を語ること」（story-telling）によって伝達される。物語の語り手の役割は、他者が後から辿ることができるような踏み跡（trail）を描くこと。聞き手は、物語の意味を、それを自らの生の歴史のコンテクストの中に位置づけることを通して発見していくのである。大野隆造

からは、『記念論文集』とワークショップは、足立孝の研究が、その経験や思考の背景となっている時代状況も含めた物語として語られたものであり、一人ひとりの研究者が自らのコンテクストに引きつけて学ぶ機会になっているという指摘がなされた。

羽生和紀からは次のような指摘がなされた。研究の歴史を知ることは、その学問に対するアイデンティティを持つために必要である。研究によって問題を解決できればよいという考え方もあるが、それだけでは学問に対するアイデンティティを持つことが難しい。学問としてのアイデンティティの共有によって、知が蓄積され、その学問は発展していく。「序説」における「多くの人々の努力が必ずしも積重ねられる形になり得ず浪費されているのではないかと云う危惧を感じせしめ」という表現について、『記念論文集』自体がこの危惧を解消する大きな力になっている。

ワークショップでは、足立孝にまつわる様々な物語が語られた。物語によって描かれた踏み跡 (trail) は、自らのコンテクストに引きつけて学ぶための手がかりである。多くの手がかりを与えていただいたワークショップに参加できたことを感謝している。

注

[1] ダチケンゼミは、大阪大学工学部建築工学科第三講座（建築計画学）に関係した研究者有志のグループで、2015年6月から2021年5月までに25回開催した。『記念論文集』の目次や入手方法などは以下を参照。<https://dachiken.jimdofree.com>

[2] 『記念論文集』の78ページに掲載の「心理学々派畧表」。

[3] 南博文から「環境側とあえて言う」という発言があったため、ここでは「」を付している。